

# 色彩学

BULLETIN OF THE COLOR SCIENCE ASSOCIATION OF JAPAN

VOLUME 4 NUMBER 4 2025



## 巻頭言 ボーダレスな大会で秋の収穫

令和7年度研究会大会

実行委員長

川澄未来子（美的感性研究会 / 名城大学）

令和7年度研究会大会を11月8日、9日の2日間にわたりてオンラインで開催しました。詳しい様子は次号（2026年2月号）で報告しますが、例年通り100名を超える参加者が集い、どのセッションも60～70名の賑わいで盛況でした。この場をお借りして、参加者お一人おひとり、スポンサー企業様、運営を支えた事務局と実行委員に、心よりお礼申し上げます。

ここでは、今大会の2つのチャレンジを紹介しますが、その前に本大会の開催意義を振り返ってみます。11回の歴史を表1に、第1回大会に示された開催趣旨を以下に再掲します。下線にご注目ください。

「この秋の大会は、会員、特に地方会員の拡大、若手研究者の育成（発表の機会増）、研究会の活性化等を目的とし、一般研究発表はもとより、研究会の研究発表やワークショップ、特別講演、見学会などを柔軟に組み合わせ、春とは一味違う内容を目指しています。」

（日本色彩学会ニュース No.284、2013年7月号）

1つめの下線『会員、特に地方会員の拡大』については、2016年以降、会場が地方都市から政令指定都市に移り、地方に活動を広げる目的から離れてしまった印象もありましたが、2020年にオンライン開催がスタートしてから、秋の大会の新たな役割が定着してきました。例えば、仕事や家庭の事情で遠出しづらい方、身体特性や体調不良により外出しづらい方、交通費を投じにくい事情の方などにも参加チャンスが開かれています。今回は、オーストラリアとシンガポールからも参加がありました。中央も地方もなく海を越え、参加者がグローバル＆ボーダレス化しているといえます。2つ目の下線『研究会の活性化』については、2016年以降、研究会代表者で実行委員会が構成され委員長を交代で担うようになり、普段は独立に活動しているグループが協力

し合い、横の繋がりを考える機会になっています。また、参加者は研究会の領域や個性を越えて同日に多彩な内容に触れられますから、1研究会主催のイベントにはない魅力があり、別の研究会に入会するきっかけも得られます。研究会大会は、参加者も分野もボーダレスな大会なのです。

さて、今大会では新しく2つの試みをしました。一つは[大会サイト](#)のリニューアルです。見栄えが一新されただけでなく、運営の情報管理が省力化されました。全国大会や他のイベントでも使えるので、今後の幅広い活用を期待します。二つめは、オンライン開催ながら初めてスポンサー募集を試みたことです。新しいサイトはスポンサーの広告掲載も見栄えが良くなり、5社のご支援に繋がりました。研究を進める上で最新の製品・サービス情報は不可欠です。対面開催における企業展示と似た役割を果たしたと思います。

春の全国大会は歴史が長く次は57回目を迎えます。『春とは一味違う』秋の大会を目指し、各研究会が質の高い企画を持ち寄り合い、オンライン開催のメリットを活かして多彩な参加者を集め、毎年、実りの秋を迎えるものです。

表1 秋の大会の歴史

	年	会場	実行委員長	担当研究会 (*印は閉会)
研究会 大会	1 2013	倉敷	河本 健一郎	—
	2 2014	清水	鈴木 敏明	—
	3 2016	大阪	土居 元紀	視覚情報基礎研究会
	4 2017	名古屋	羽成 隆司	美しい日本の色彩環境を創る研究会*
	5 2018	東京	坂本 隆	コスメティクスと肌・顔研究会*
	6 2020	オンライン	高橋 晋也	くらしの色彩研究会*
	7 2021	オンライン	鈴木 卓治	画像色彩研究会
	8 2022	オンライン	溝上 陽子	色覚研究会
	9 2023	オンライン	酒井 英樹	カラーデザイン研究会
	10 2024	オンライン	西 省吾	測色研究会
	11 2025	オンライン	川澄 未来子	美的感性研究会